

北緯五十度線

太陽がまだじゅうぶん昇りきらない朝、列車はツンドラの林の中に臨時停車した。そこは、ユジノハンダサという小さな町のわずかに北、サハリンのちょうど中央部にあたる。この深い原生林の中をかの北緯五十度線が通過しているのである。

列車から降りると、もやのような霧が足元に流れ込み、蚊のような小さな虫が身体にまとわりつく。添乗員が防虫スプレーをあたり構わず吹き散らした。

「このあたりが、旧国境線のあった、北緯五十度線です。蚊がいつぱいいますからあまり刺されないように」

添乗員は説明するより、スプレーのほうをはるかに忙しい。

小さな沼を横目に、黒っぽいじめじめした土を踏みしめながら、薄暗い茂みの中をぬって歩く。あたりは湿地帯特有の湿っぽい匂いがいつぱいだ。ぬかるみのような湿りきった地表である。少し歩くと、やがて大きな道路に出る。サハリンの南北を縦断するジャリ道の幹線道路である。もちろん、こんなに朝早く通る車もない。

「この道が、かの有名な岡田嘉子さんと杉本さんが越境した道です。私が生まれる前のことですから、私は見てい

ませんが、すごい雪だったそうです」

添乗員はとても楽しそうである。

広々とした道路を五分ほど歩くと、道路沿いに北緯五十度線の記念碑が白樺の林をバックにひっそりと立っていた。ロシア語で書かれた小さな記念碑以外に、別にこれといった標識も目印もない。それは、まるで忘れ去られた歴史の遺物のようだ。その記念碑の前で皆思い思いに記念写真を撮る。碑の前で線香をあげる年配者、記念写真に余念がない若い旅行者、植物に見とれる中年の夫婦。それぞれにその場に想いをさせているのだろう。

八一九四五年八月十一日、ソ連軍は南サハリンとの国境を越え、本来のソ連の領土であるサハリンを解放した

▼
碑文の説明をしながら、ワレリイ氏は複雑な表情である。半世紀後の今、こうして日本人旅行者を案内して、北緯五十度線を北へ越えるのである。

雲の間から、口が射し始める。暖かい夏の日差しである。とど松林の向こうにようやく青空が見え始めた。旅行者たちの記念撮影はまだまだ続いている。小さな虫が身体の周りを飛び回る。添乗員はスプレーをかけ続けている。

平和な一日の始まりである。

